

19世紀初頭におけるスコットランドの人口論
——ハミルトン版『講義』と『学生ノート』の比較を中心に——

荒井 智行

(中央大学経済学部助教)

第1節 はじめに

デュガルド・スチュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) は、18世紀において人口を扱った多くの社会学者や思想家の人口論に言及しているように、人口について大きな関心をもっていた。本報告で取り扱う『政治経済学講義』(以下、『講義』と略記) 第1編「人口について」は、同書全体のおよそ3割を占めている。その分量の多さから見ても、彼にとって人口が重要な主題であったことが伺える。

スチュアートが『講義』第1編「人口について」において細心の注意を払ったのは、18世紀後半以降に進行しつつあった過剰人口という現象であった。過剰人口の問題に関するスチュアートの見解において特に注目に値するのは、1800年から1810年までの講義を1855年に編集したウィリアム・ハミルトン版『講義』(全2巻)と、1808年から1809年における『学生ジョン・ダウによるスチュアートの政治経済学講義ノート』(全3巻、以下、『学生ノート』と略記)において、その内容がそれぞれ異なることである。これは、『学生ノート』が特に参考にされている『講義』において、両著作の全体を比較したうちでその内容がもっとも異なる箇所であった。

スチュアートの『講義』の中で記されている「1800-1801年冬の講義計画」の目次には、「付録」という章の中に「中国の人口」という項が存在する。そこには、過剰人口による人口増加の危険性というサブ・タイトルがつけられている。しかし、『講義』の目次には、それらの項目を見出すことができない。また、『講義』では、中国の過剰人口について深刻に論じるスチュアートの記述が若干あるが、中国における人口増加の問題については詳しく論じられていない。その一方で、『学生ノート』では、『講義』には見られない中国における人々の窮乏化の例を取り上げながら、中国の過剰人口について詳しく論じられている。

本報告では、『講義』と『学生ノート』を比較しながら、過剰人口の問題に特に焦点を当てて、スチュアートの人口論を再構成することを目的とする。

第2節 『講義』の人口論

スチュアートが人口の増減をめぐる問題から考察しなければならなかったのは、もし人口の増加が人々の生活資料を生産する大地の力を上回るならば、よりいっそうの食糧供給が必要とされると考えられたからであった。『講義』第1編「人口について」の冒頭では、人口の主題が「自然史」と「政治経済学」に分類されている。彼は、まず「自然史」の点から、世界各国の人口の増減を確かめるために、さまざまな国や地域における風土や文化的特徴から考察している。例えば、気候の違いによって人口の増加速度が異なる点や、諸外国における地元の伝統的な農業労働と人口の増加との関連などについて分析している。続いて、「政治経済学」の視点から、国別地域別に人口増加の速度が異なる点や時代別年別の男女の人口構成比率、男女の出生と死亡比率などについて詳細に調べている。

これらの「自然史」と「政治経済学」の両面の検討から、スチュアートは、世界的に人口が増加している事実を確認する。そして、食料の増加よりも人口の増加が上回ると主張するマルサスの人口法則の考えに同意した。しかし、スチュアートは、人口増加によって食料生産が間に合わなくなるために国民が困窮することになると論じたマルサスのように悲観的にならなかった。農業生産力の拡大と製造業の今後のさらなる発展によって、近い将来において、人口の増加によって失業が生じる可能性は少ないと考えられたからである。このことは、彼のある種の楽観的な自然観が影響している。だがその一方で、次節で見るように、スチュアートは、過剰人口の問題については深刻に考えていた。

第3節 『講義』と『学生ノート』における過剰人口論

スチュアートが過剰人口の問題の考察に取り組んだのは、政治制度が良ければ平等が生まれ貧困は発生しないとするロバート・ウォーレスの（過剰）人口論に特別の注意を払っていたからであった。スチュアートは、過剰人口の弊害が非常に切迫した問題であり、たとえウォーレスの言うように平等な社会を基礎に論じても、「食糧不足による困窮」は、全地球上の土地が耕作され続けている間においても、急速な人口増加が、短期間のうちに食料の増加よりも上回ってしまうと批判する。

こうした点から、スチュアートは、過剰人口の問題を貧困の原因でもあると考えていた。ウィリアム・ハミルトンが『講義』の脚注で指摘するように、スチュアートが人口の増加

についてもっとも強く影響を受けたのは、マルサス『人口論』の初版であった。スチュアートは、マルサス『人口論』において、地球全体の人口増大によって無数の窮乏が生じると論じられている点に特別の注意を払っている。それは、スチュアートが、ヒンドスタンと中国において、人口の激増とともに両国とも飢饉によって多くの人々が餓死している事実を重く見ていたからであった。スチュアートは、アメリカ合衆国や中南米の国々においても人口が著しく増加している事実を確認しているが、人口の増加による貧困が憂慮すべき事態に至っているのはヒンドスタンと中国であると見ていた。彼によれば、中国もヒンドスタンもともに人口過剰であり、飢饉が生じる度に食糧不足による窮乏によって、相当の数の人々が命を落としているからである。

スチュアートが両国の過剰人口の事情に精通していたのは、『講義』の内容から知り得ることができない。ヒンドスタンの飢饉については、彼は、「フランシス・ホーナーからの手紙」(1805年4月6日)からその事情を知り得ていた。同手紙には、その当時インドに滞在していたジェイムズ・マッキントッシュが、インドの窮状をホーナーに伝えた内容が記されている。一方、中国の飢饉については、特にサー・ジョージ・ハウントンの見解からその内容を把握していた。スチュアートが中国の巨大な人口について深刻に述べているのは、中国人全てが決して裕福ではなく、中国において「周期的飢饉や乳幼児の遺棄」によって貧困が増大しているという認識に立っていたからであった¹。

『学生ノート』では、ヒンドスタンよりも中国の人口問題にもっぱら焦点が当てられている。中国の過剰人口についてスチュアートが特に懸念したのは、中国が製造業の発展によって労働需要をたとえ増加させたとしても、労働賃金も高まるかどうか、また、こうした桁外れの人口をもつ中国において、「窮乏」状態に置かれている無数の人々に対して、「生存」を確保するための「救済」が実際に行き渡るかどうかということであった。スチュアートは、これらの点について考察するに当たって、中国の人口を支えるだけの農業と製造業の発展が望めるかどうかについて検討している。

スチュアートが中国の人口問題を特に深刻にさせていると考えたのは、「自然の秩序」を妨げる「制度」であった。彼によれば、中国における人口増大の原因の一端には、「不自然な制度および習慣」が影響している。そこには、中国の圧政的な政治が関係していると言

¹ スチュアートは、中国の貧困問題の具体的内容について、ここではあまり説明していない。しかし、『学生ノート』では、中国の貧困について論じる中で、『講義』第1編「人口について」の中には見られなかった「周期的飢饉や乳幼児の遺棄」という言葉の使用が見出される。

う。そうした政治制度の下で、中国において既存の制度を変えることが特に困難だと考えられたのは、中国がまだ文明化されていないという認識に基づいていたからであった。このような観点から、スチュアートは、経済発展を妨げている中国の「不自然な制度」を単に問題にしているだけでなく、「社会の進歩」（＝文明化）をも考慮に入れながら、中国の政治制度を正す必要があると主張する。ここで特に注目に値するのは、スチュアートにおいて、中国の貧民の状態の改善は、自国で取り組むべき課題であるとされていることである。スチュアートの『講義』では、非文明諸国の是正策の1つとして、国際的な商業取引が行われることが重要であるとされている。だが、彼によれば、中国では、圧政下において自然を妨げる諸制度や法律によって、自由な商業取引が行われていない。そのため、諸外国が中国人の状態の改善に干渉することは不可能であると論じられている。

スチュアートは、中国の人口問題についてのこれらの検討を通じて、グレート・ブリテンにおける農業と製造業の発展による経済的繁栄のされ方に注意を促している。『学生ノート』第1編「人口について」の末尾では、「勤労と企て」による自由な経済取引が行われるならば、統治制度を促進し、社会は進歩すると述べられている。また、『講義』第1編の後半部分において、過剰人口によって困窮が生じているとする中国とヒンドスタンの事例を述べた後で、次のように結論づけている。人口の増加が認められるのは、人口の数を支えるだけの「必要な基金」に見合っている場合である。「闇雲な人口の増加は、貧困や悪徳を生じさせるだけ」である。「狭い商業的な視点で人口を単に考察することは、不適當だけでなく、不公平で非人間的である」。すなわちスチュアートは、市場の公平さと倫理ないしモラルの面から、そのような人為的な人口増加政策を批判する。過度の商業的な見地から、富者の財産に従属し低賃金に服する人々を増やすことによってブリテン一国が他の諸外国よりも優位に立つことは、不公平でありモラルに大いに反すると言うのである。

これらの点から、スチュアートは、経済と社会もしくは経済と倫理とを結びつけながら、適正な人口の規模に見合った市場社会を想定していたということが出来る。ここで興味深いこととして、彼にとってこのような市場社会が達成されるうえで重要とされるのは、次節で見るように政治家の役割とされていることである。

第5節 政治家の役割

『講義』第1編「人口について」の後半部分では、人口の増加に関する政治家の役割に

ついて論じられている。人口の増加によって溢れ出した「何百万人もの人々の幸福を与えるのは、立法者の重要な役目である」と述べているように、スチュアートは、農業と製造業の双方の発展を考えるうえで、政治家ないし立法者の役割を強調する。それは、失業者の暴動によって社会の秩序が乱れる点を重く見ていたからであった。彼によれば、イングランドの長い歴史において失業した下層階級が不道德と不服従になり、その結果、彼らが賢明な君主に対して度々反乱を引き起こしてきた。そのような観点から、スチュアートは、社会の改善と幸福を達成するうえで、政治家が世論の動向にいかに従うかを問題にしている。

ただし、スチュアートは、人口問題や機械問題による失業者の暴動について、今後はこれ以上深刻な事態になるとは見えていなかった。彼が失業による民衆の反乱が今日まで次第に減少してきたと論じているのは、近年、驚異的に科学が進歩していることによって、雇用の分野が拡大されているからであった。さらに、商業の発展と雇用の拡大によって、「多数者はより良き習慣へと変貌していると述べている。すなわち、製造業や商業の発展に伴う近年の科学の進歩は、雇用の拡大だけでなく、民衆の道徳的改善にも良い影響を与える」とされる。これらの点から、スチュアートは、国民全員の雇用を確保すると同時に、彼らを勤勉にし道徳的に改善するように仕向けることが政治家の役割であると結論づけている。

第6節 おわりに

18世紀末以降の著しい経済発展を背景にして、近い将来において失業は解決されると見ていたスチュアートは、失業問題を深刻に考える必要はなかった。しかし、ヒンドスタンと中国の人口問題に特別の注意を払っていたように、過剰人口の問題については、決して楽観視していたわけではなかった。スチュアートの過剰人口論において特筆に値することは、非倫理的な経済成長の追求のみを軸にして、ブリテンの経済発展を展望していなかったことである。未開社会において「狭い商業的な視点」によって人口が増加している点を強く批判していたように、適度な経済発展と文明社会との両立こそがスチュアートの人口論の特徴をなしていたといえることができる。

『講義』第1編「人口について」の結論部分では、人口の増加と失業の問題に関して、政治家の役割が重んじられていた。このことは、彼が、雇用の提供を経済的かつ政治的にも重要な問題であると考えていたことがわかる。そうした彼の人口論には、国民全員の雇

用を守ることが唯一の目的とはされてはいなかった。民衆を道徳的に改善するように仕向けることが政治家の役割であるとされていたように、文明社会のあり方も問題にされていた。スチュアートの人口論が、国民の雇用の確保だけでなく彼らの知的な改善をも視野に入れられていた点で、彼の政治経済学は、スコットランド啓蒙末期において、市場社会を貫く文明化作用を併せ持つ独自の視点を有していたということができる。

だが、そのような特徴をもつスチュアートの人口論について本報告で示す内容は、彼の人口論研究の予備的考察にとどまるものといわざるをえない。スコットランド啓蒙思想史上における文明と野蛮との関連で、スチュアートにおける文明と野蛮との議論をより深めていくことや、本報告では扱っていないスチュアートの『講義ノート』における人口論と本報告で示した彼の人口論の内容との異同関係などについては、今後さらに検討すべき急務の課題である。

参考文献

Horner, F. (1805) *Letter to Dugald Stewart*, 6 April, Edinburgh, University of Edinburgh Library, Phot.1717.

Stewart, D. [1800 - 1810] (1994) *Lectures on Political Economy*, in *The Collected Works*, XI vols. (1854 - 1860), ed., Sir W. Hamilton, vols.VIII-IX, Edinburgh, Thomas Constable / London, A. Hamilton; repr. Bristol, Thoemmes Press.

——— (1808 - 1809) *Student's Notes of Lectures on Political Economy, probably by D. S. Signature John Dow*, III vols., Edinburgh, University of Edinburgh Library, Dc.3, 105-107.

参考文献表は当日配布致します。